
とある英雄の物語

也屋拓郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある英雄の物語

【Nコード】

N8702Z

【作者名】

也屋拓郎

【あらすじ】

かつて龍と人間が共存していた。

プロローグ

風が強く吹くことを龍の咆哮と例える。このアルトリア大陸ではそう呼んでいた。

なぜなら古くからの伝承で人間はかつて龍とともに生活をしていたと言われている。しかし今ではもう昔のことであり、噂でしかない。

ゆえにその伝承はもう語りであり、言い伝えでしかない。真実だと誰も思わないのが末だ。

その大陸にある小さな光がともされる国から民族の音が聞こえる。その音にあわせて響く手拍子と歓声。『空』を支配する我らにとつて目もくれない光景だった。

我らは十全な生き物である。孤独であろうと我らは生命を食らいその生命を糧にして生き、そして駆逐という蹂躪を求め我らは炎を吐く。そして我らはその存在を証明してゆくのだ。

ゆつくりと旋回しながら我らはその嬉々として踊る彼らを今一度見つめる。

なんと儂い生き物なんだろうか。笑いあい、踊るその姿はまるで蟻の列を眺める様だ。今襲えば我らの血肉として死すしかない存在非力である。

びゅうと風を引き裂く音が我らの耳を掠める。龍の咆哮が聞こえる。

我らは風を凪いだ。喧しい風が静かに消え去る。

どうしてだろうか？ 我らは孤高にして孤独の存在であるはずなのに……。毒が体中を回るようなこの気持ち。それは鼓動を強く打ちつけ、そして急速に早くなる。

我らは恋をした。

彼らに、恋をした。

世界は混沌に満ちている。

アルトリア大陸のある国にいた一人の魔導師はそう高らかに言い放った。その魔導師は国の中で魔力もない劣等師マルグという烙印を押されていた者だった。

マルグと呼ばれたものは国民より地位の低い権限をあたえられ、国民から非難を受けるばかりだ。名誉の高い魔導師は王宮魔導師として王の次に偉い権限がある。魔導師の権限は雲泥の差があるほどに広がった。

そのマルグは王宮の前で高らかに言い放った罪で魔導師は王宮の牢獄へと閉じ込められる。

罪状はもちろん死刑。

国の平和を狂わせる異端者として国民の罪の見せしめとなった魔導師は王宮の牢獄にわずか四日しかいなかった。

しかしその牢獄にいた牢番は魔導師の声をずっと聞いていた。

「世界は混沌に満ちている。早く、秩序を正せねば……英雄を早く見つけなければ……」

英雄とは何なのか？ 秩序を正す？ 牢番はそんな言葉を思い出して見ては自分には関係のないことだと頭を振るって、忘れることに専念した。

その一カ月後その国は芋虫を食い殺す蠅のように跡形もなくなっ

た。

邂逅

「ヤーレ！ ソーレ！」

掛け声がかかる。広場の中央には大きな薪を組み合わせて燃やしている。男たちはその火に薪を二人係で投げると火とぶつかり合い、火の粉が飛び散る。それらを観客は歓声を上げていた。

「踊ろう！ 飲もう！ 我らの謝肉祭！」

舞台の上にいる男が弦楽器を担いで歌っているその声はもうかれているがそれに合わせて女たちは華やかな衣装を着て風のように踊っていた。右へ左へ動き、手を上げて拍手をする。その拍手にあわせて周りの観客は手を叩いた。

その中に一人手を叩かない男が一人いた。

その男は同じ席に座っている男と酒を飲みあっている。向かいの男も顔を真っ赤にしてぐいぐいと酒を飲んでいたが、ばたりと机に突っ伏した。

「俺の勝ちだ！」

高らかに叫び立ち上がる男の名はシグナフリードといい、皆からはジグと愛称がある。年は十八。中肉中背で白銀の髪を有し、耳が隠れる程度しかない。この国の守護騎士をやっており、日々訓練を絶やさない男だった。長身は片親で母親しかいない。父親は大工をしており、教会の建設中に足を踏み外し亡くなっている。

もう三年前の話である。

そのジグは据わっている目を擦り、席を外す。

「おい！ ジグまだ勝負はついてねえぞ！」

「便所だ。お前も来るか？」

けつと違って、飲み相手は酒を飲んだ。口端から酒が漏れている。そのうち酔いつぶれるだろうとジグは思考を回す。

しばらく先に行ったところに公衆の廁がある。ジグはそこまで歩いてゆく。

建物の間を歩くと龍の咆哮が聞こえた。ジグはその咆哮を心地よく耳を澄ましている。耳をかすめ通るその声は耳元で問いかけるようなものだった。不快なものでもなく、寒い季節になると鋭利な葉で切られるような痛みを思えるものの、手で暖めればそういう痛みもすぐになくなった。

ジグは深く息を吐くと、さっきまでの下腹部の緊張が和らぐ。急いで中に入って用を足した。

ジグがいるアルトリア大陸は世界で一番大きい大陸である。その大陸の大きさは国が三百の国と千の植民地もあれば大体が分かるだろう。その彼がいるニーベンルグ王国はアルトリア大陸の中でそれほどおおきな国家ではない。軍事事業はそれほど大きいものではないし、植民地など一個も保有していない。

ニーベンルグ国はこの寒い時期になると暖かい季節に入っても厄が来ないようにと言う意味で祭りをする。広場に長年飾っていた厄除けの飾りを集め、燃やし、それを天に帰すという考えで大きく炎を育てるのだ。

元の広場に戻ると飲みあいをしていた男はもう死人のようにつぶれていた。

「はあ」

周りにはたくさん飲んだあとがある。要するに、吐瀉物だ。最初は者と一緒に出ているがその後はもう酒しか出ていない。その男の口からするのは胃酸の匂いだけだった。

ため息を漏らすほか何もなかった。

男の家に身柄を渡す。

「ジグ君毎回毎回ありがとうね？」

男の妻は彼を家に入れると微笑む。

「いえいえ、そこまでのことはしてないです。この人は毎度のよう

に酒を飲んではずつ倒れるんですけど……」

「たぶんジグ君が毎日のように運んでくるからじゃないかな？」

「毎回つて、確かにそうですね……」

ジグは少し呆れるように笑うしかなかった。

「もう、こんな人なんて道端に捨てておけばいいのに。ジグ君に迷惑かけちゃってもう……」

「では俺はこれにて……」

「あ、これもつていきなさい。お裾分けよ。昨日組合の人が猪を獲つたみたいだね。くれたのよ。だから燻製にしたからよかったらあげるわ」

「あ、ありがとうございます」

彼女はそういつて燻製にした肉をくれた。二人分以上の量だ。たぶん食べ終わるのに相当時間がかかる。それをジグは手に提げて、一度礼をした。

「ではこれで……」

「また相手してあげてね？」

「もちろん喜んで」

ジグは男の家を後にした。

もう完全に明け方になりかけている。これだともう祭りはもうやっつてないだろうなあと少し残念そうに思った。なにせその祭りは十八未満は参加ができないからである。初めての祭りなのにちよつとしか参加できなかったことに後悔をする。

だが、そこで根が折れる彼ではない。一縷の可能性を求めながら広場へと足を進めた。

広場の近くまで行くと炎の光が見える。ジグはよかったと思いつてを進める知らず知らずのうちに足は大きく歩幅を広げていた。

しかしそれは違った。

やけに静かなのだ。その炎が暖かいもののはずなのに冷たく、そして静かな恐怖でしかない。

喉を鳴らしその広場に顔を出す。広場を中心にして映える建物は

幻想的だった。もちろんのように周りには誰もいない。もう解散した後であり、酒の匂いも、肉の匂いも何もかもなかった。閑散としたその広場に火はついていて、といても組み合わせた木が燃えているわけではなく、轟々と燃える材料は巨大な丸太だ。大の男が五人がかりで持つてこないと無理な大きさの丸太で、その中央部分が集中して燃えている。その木はまだ生木で時々爆ぜる音がたまに聞こえる。その火の目の前で少女が立っていた。不思議な光景だった。生木の燃える広場で少女が立っている。その光景を見て誰もが不思議である。逆光で見えないがその影から容姿は整っているのは十全に分かる。その少女は年からして十五か。

少女の右手がゆっくりと動いた。そして一歩右へと跳躍する。着地は音もなく、そしてくるりと一回転した後、軽やかに跳躍をする。その動きは祭りの踊りの一節だった。

それを単調でありながらも綺麗で繊細なその動きにジグは見蕩れていた。曲がなくても踊りを見るだけで曲が聞こえる。

龍の咆哮が聞こえる。

もっと見てみたい。その下心でジグは知らない間に歩みよっていった。なぜならそれほど少女の動きはあまりにも軽やかで、そして美しかった。

なぜならそれほど少女の動きはあまりにも軽やかで、そして美しかった。

そう、美しかった。

だがジグの足取りはなぜか普通に歩いているわけではなく、忍び足だった。少女の踊りを近くで見たいと思い邪魔をしたくなかったのだ。だが、足元に落ちているのは細い枝だ。その枝葉葉をつけて床に散りばめられている。足を踏み出すとみしみしと木がしなる音が聞こえる。

細心の注意を払ってジグは踏み出すと踏み場が悪かったのかばきんときが綺麗に鳴り響いた。

「っ！」

少女は振り向いた。

逆光に隠されていた容姿は明らかになる。綺麗な背中中央へこんだ背筋に綺麗に形作られた腹の筋、その中央にある小さな臍。美しい線は素肌だった。控えめにある乳房も露出している。

裸だった。一糸纏わぬその姿にジグは声を漏らした。

ジグはそこで思考が停止した。彼女の目は鋭くそして青く美しい虹彩で蛇のような鋭い動向を有している。髪も火の光でまったく分らなかったが、空色で綺麗だった。ジグは彼女の目を見つめたまま一言言った。

「綺麗だ」

「……！」

突然ジグの隣の石畳が砂埃と一緒に爆ぜた。爆風のような衝撃がジグを襲う。頬に石飛礫が襲う。小さい石が当たってもそれほどもないが数であたるとそれは打撃に等しい。ジグは横目でその爆ぜた原因を見た。

青い鱗に覆われた尾。規則的に流れるその鱗は魚とは違い逆立ってまるで一種の鈍器のようだ。だがその尾は蛇とは違い魚のようなひれを持っている。

「貴様、下種な分際で我を綺麗オレというか」

透き通るその声。女性特有の楽器のような音のようだ。ジグは真っ直ぐその少女を見つめた。

「綺麗じゃないのに綺麗というのはおかしいと思わないかい？ 俺は君が綺麗だとおもった。だから綺麗というのに異論はあるのか？」

彼女は頬を染めていた。ジグは一步前に足を出した。

「くるな」

「でもこんな季節に服を着てないのは見ている俺も寒くなる。お願いだから何か着てくれないか？」

確かにと彼女は頷いた。実際自分の状態を分かっていたらしい。

実際胸を腕を手で隠しているわけで、それなりの羞恥心があったら

しい。するとざわざわと背から青い鱗が張ってくる。胸を隠し、そして下へと鱗が伸びて行き、臍を隠すように鱗が広がる。

ジグはそれを確認した後、彼女に問う。

「君はもしかして龍か？」

「掟を守り、誇り高き龍だが人間の貴様はなにを聞きたい」

「いや、確認だただの」

予想外の答えに彼女は肩透かしを食らった。無感動のほかにはその返事にさつきまで隠していた鱗がざわざわと動いていた。そして肩を震わせると怒声をあげる。

「き、貴様のような浅慮なやつに会ったのは初めてだ！ 貴様を食つてやる！」

少女は手を上げジグに向けて振り下ろそうとする。

「僕を？」

ジグは質問を返す。すると少女の手は止まる。

「そうだ！」

「ならなんですぐに僕を殺さないのさ」

「うっ……」

彼女は言葉を詰めた。

「お、掟に『無知には全能の知識を教える』というものがあってだな。それを完遂せねば殺すこともできないのだ」

だから、と彼女はつなげる。

「貴様が質問をすると私は殺すこともできないし食う事もできない。貴様は黙って羊のように殺され、食われろ！」

そういつて手を上げると突然空腹の音が響いた。ジグではない。

ジグは祭りであらふくと肉を食い、男と酒の飲みあいまでした。明日の昼まで食べなくても大丈夫なくらい満腹だったのだ。ならば腹の虫を鳴らした者は。

「腹減ったのか？」

「う、うるさい！ 黙って食われればいいのに！」

顔を赤くしてしゃがみ込む。ジグはただただ彼女を見ているだけ

だった。

これが…龍なのか……。

ジグは頭を少し抱えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8702z/>

とある英雄の物語

2011年12月28日08時46分発行